

田畑の草種

鳴門澤菊 (ナルトサワギク)

もう20年以上も前のことになる。その頃、山持ちで製材所を経営しているKさんと一緒に仕事をしていたことがあった。Kさんは山仕事のほかに自家用米としてわずかばかりの田んぼを作っていた。しかし山仕事が忙しくなるとそのわずかな田んぼの畦畔管理に手が回らなくなると嘆いていた。そんなとき、淡路島で県のモデル事業として間伐材を利用した畦畔管理のための施工技術が行われていることを知り、自分の山から出る間伐材を利用できないかと視察に赴いた。間伐材は防腐剤などが注入され、丸太あるいは板材などで畦畔を覆うように加工され、管理にもよるが10年は持続できるだろうということであった。Kさんは間伐材で覆われた100mほどの畦畔を熱心に観察していたが、その前の道を隔てた反対側の畦畔には一群の黄色い花が咲き誇っていた。そこを訪れたのは12月の初めてで、畦畔には枯れたエノコログサやカヤツリグサがある中でその黄色い花はことさらに引き立っていた。その花がナルトサワギクであった。

ナルトサワギクはキク科キオン属の一年草または多年草。マダガスカル原産の帰化植物で、日本へは埋め立て地などの緑化資材(シロツメクサやシナダレスズメガヤなど)の種子に混入して入ってきたものと考えられている。1976年に徳島県鳴門市の埋め立て地で発見されたのでこの名があるが、学名の確認まで20年を要した。空き地、道端、造成地や埋め立て地などオープンなところに侵入しているが、牧草地にも入り込み、河川敷などの比較的湿ったところにも侵入している。現在、福島県以南の太平洋側の府県の半数ほどで分布が確認されているが、分布がないとされている県でも確認されていないだけかもしれない。

茎は無毛、基部で多数分枝し大きな株になる。枝は直立、叢生し、背丈は20-70cmになる。葉は互生、普通は無柄で披針形～線状披針形、葉縁に不揃いの浅い鋸歯がある。茎の頂部は分枝し、直径2-2.5cmほどの鮮黄色の頭状花を上向きに多数つける。舌状花と筒状花があり、舌状花は長さ約1cmで普通13個。筒状花は舌状花と同色。

通年開花し風あるいは虫によって受精するため、一年中花を咲かせ種子をつける。花が終わるとタンポポのような白色の綿

須藤 健一

毛を付け、長さ1mmほどの種子は風に乗って分布域を広げていく。

全草に肝毒性の高いアルカロイドを含み家畜に対する中毒性が報告され、また、繁殖力が極めて強くアレロパシー作用を持ち在来種を駆逐する危険性が高いことなどから、2006年に特定外来生物に指定された。

淡路へ間伐材畦畔を視察に行ったときにはまだ特定外来生物に指定されていなかったから、抜き取りも持ち帰りも自由であったが、今では外来生物法違反になる。しかし、真冬の厳冬期でも鮮黄色の花を咲かせ、一株で多くの花を付け、冬の野菊という風情を持つことなど、ナルトサワギクが特定外来生物に指定されていることを知らなければ、持ち帰って庭に植えてみようという人がいても不思議ではない。

冬に庭に植えたナルトサワギクの花を愛でるより、自然にある花を愛でたいものであるが、道路沿いの造成された空き地や斜面に、所狭しと鮮黄色の花を広げているナルトサワギクを見ると、その危険性を知るほどに、愛でるどころの話ではないと思えてくる。

